JSTネットワーク形成地域型

とちぎサイエンスらいおん

http://www.tochigi-lion.net/

実践講座記事作成クラス

渡辺采香さん（日光市）

「四季成り」研究に力

県いちご研究所

課題は食味の向上

とちおとめの後継品種、スカイベリーを開発した県農業試験場いちご研究所（栃木市大塚町）が、一年中収穫できる四季成り性イチゴの開発に力を入れている。実現には長い年月を要するが、関係者は課題の「食味」を備えた四季成り性イチゴが文字通り実を結べば「生産量日本一の栃木のイチゴをさらにけん引してくれる」と期待を寄せている。

同研究所によると、市場に流通している一般のイチゴのほとんどは一季成り性である。一季成り性は自然条件では5～6月に実を付けるが、促成栽培により12月のクリスマスシーズンから翌春まで収穫できる。

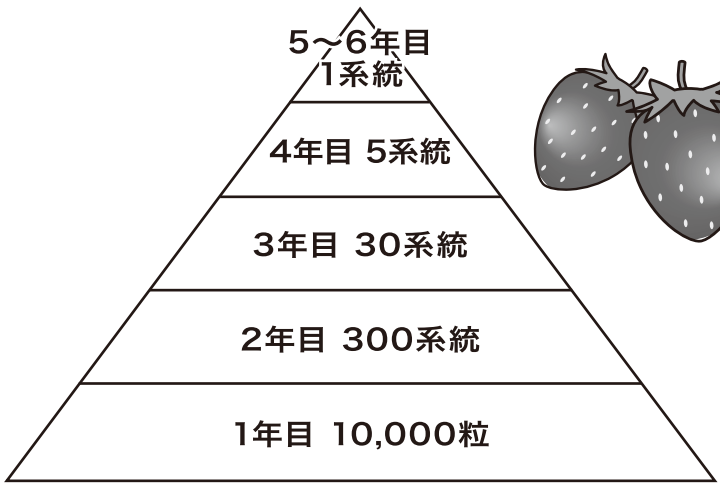
しかし夏に収穫することは難しく、7～9月の空白期はほとんどが輸入で賄われるという。

一方、四季成り性イチゴは一年中いつでも花を付け、収穫することができる。ただ四季成り性の研究の歴史は一季成り性に比べて浅く「食味や輸送性などの果実品質が一季成り性に追い付いていない」と、同研究所の植木正明特別研究員は話す。

同研究所は2009年、最初の四季成り性イチゴ「とちひとみ」を、11年にはその改良種「なつおとめ」を品種登録。植木さんによると「食味の面でとちおとめに及ばない」ため、引き続き研究に取り組んでいる。

品種開発において、多くのイチゴを有する同研究所はさまざまな組み合わせを試せるため優位に立つ。さらに近年、遺伝子の並び方の違いを目印としたDNAマーカーの技術開発が進み、育種が効率的にできるようになってきた。

とはいえ、新しい品種を開発するには約1万株から一つ一つ味を確かめて選抜するなど「少なくとも7年はかかる」（同研究所）。植木さんは「10年後を目標に何とか一季成り性相当の食味を出し、一年中収穫できる夢のイチゴを誕生させたい」と意気込みを語った。



1万株のいちごから優良な系統を選抜する過程

サイエンスらいおん実践講座

栃木の科学技術を元気にする活動に取り組む「とちぎサイエンスらいおんプロジェクト」では、栃木県内の研究者・技術者またはサイエンスイベントを取材し、新聞・テレビ・Webサイトなどを通じてその魅力を発信できる力を身につける実践講座を行ってきました。映像制作クラスの最優秀作品は、本日18:00～とちぎテレビ「イブニング6」で放映予定です（http://www.tochigi-lion.net/）。また、実践講座のまとめ(リフレクションカフェ)を2月9日13:20～宇都宮市豊郷台の帝京大学で開催します。入場無料、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

企画制作 / 下野新聞社営業局